

「飛鳥山は大江戸の昔から上野、向島とともに  
ならび称せられたサクラの名所、もと飛鳥明神の祠が  
鎮座していたためその称が起こったものである」（北区史）

王子駅前の、白いビル、その七階にロビーがある。  
そこに、長身で猫背の中年男が一人。  
地味なスーツに、地味なネクタイ。  
顔も地味だが、どこか精悍な面構え。  
髪は薄く、黒縁の眼鏡をかけている。  
中小企業の万年経理課長、といった雰囲気だ。  
老舗の和菓子屋、〈平塚亭〉の紙袋を提げている。  
平日のせいか黄昏どきのせいか、他にはだれもいない。  
猫背の男は、全面ガラス張りの窓から、眼下の〈飛鳥山公園〉を注視している。

\*

十分後、猫背の男は、電車の音を聴きながら石神井川沿いを歩いている。  
王子駅付近を流れる石神井川を、〈音無川〉と呼ぶ人もいる。  
流れると言ったが、流れると言うほどの水は見られない。  
川水をまったく見ない、川音をまったく聴かない季節もある。  
いまは、水遊びをする子供の脛くらいまでの、水が流れている。  
石神井川の川辺には、小さな飲み屋が乱立している。  
春のだらけた夕陽を浴びた猫背の男は、それらのなかの三階だての建物の前で足を止めた。  
小さくしかも欠けた文字で、〈3Kビル〉と名付けられているが、ビルディングというイメージとはほど遠い。  
皆無といっても間違いではない。  
地元ではこの3Kを、（くさい／きたない／きみわるい）の3Kだと言っているが、本当の意味は解らない。  
単純に三階だてだから、3Kビルなのかもしれない。  
1階は流行らないスナック、2階はもっと流行らない雀荘、3階はさらに流行らない私立探偵事務所。  
猫背の男は、階段をゆっくりと登り、3階の扉を叩く。  
扉には下手な文字がマジックペンで記されている。  
〈郷田狂介ゾーン〉

反応がないので、猫背の男は声をあげる。

「おい、きちがい、いるか」

仕事柄なのか、いささか獣じみている。

「あたしの名前は、きょうすけよ」

この事務所の主の、寒そうな声だ。

「なんだ、いるんじゃないか」

猫背の男は、扉を開ける。

「きんたま、か、久し振りね」

郷田は笑うが、顔が引きつっているとしか見られない。

声と同様に、容姿も寒そう。

普通に外を歩けば、ホームレスと間違えられるだろう。

「おれの名に、まを付けるな」

猫背の男は、白鳥金太という名だ。

白鳥は、狭い部屋を首のストレッチでもする風に、見回す。

六畳一間で、事務所兼住居、3Kビルの3階というよりも、屋根裏部屋という感じ。

「ますます汚くなったんじゃないの」

白鳥は、歯に衣を着せぬ言い方をする。

それなりに長いつきあいだから、周りは〈腐れ縁〉という言い方をする。

「顔も悪いが口も悪いわね、築半世紀だもん」

郷田は仕方ないという調子で言って、自分が坐っていた、一つしかない椅子を白鳥にすすめた。

白鳥は、ゴキブリを払う手付きで一撫でしてから、おもむろに坐る。

「白鳥刑事のおでましとなると、きつとこそ泥事件ね」

郷田は、茶化した言い方をした。

「きちがい探偵、若年性アルツハイマーか」

白鳥も、毒舌では負けていない。

「あんたとちがって、還暦までまだ三十年あるわ」

白鳥が渋い顔をするのを無視して、郷田は、マルボロに百円ライターで火をつけた。

「おれは死ぬまで引退しねえぜ」

白鳥は強がったが、来年は交通課への異動が決まっている。

「あたしはキチガイ探偵だから、もうすぐ引退よ」

「すねるな。地元の難事件も知らないのかと思ったもんでね」

「もしかして、〈飛鳥山殺人事件〉なの」

「それさ。おれたちは、〈サクラ殺人事件〉と呼んでいるがね」

「ああ、被害者が区議会議員の桜井新吉だからね」

「いや、花見の季節に刺殺されたからさ。正確には死亡推定時刻は、昨年一九九九年の四月三日、午後七時から九時。発見は翌四日の朝九時。桜井の所持品は総て持

ち去られたが、桜井の顔は地元では知られている。多量の睡眠薬を飲まされて、胸部を刺された。どっちが直接の死因かは、鑑識の方で調べたが結論は出ていない」

「怠慢よねえ」

「これが案外めんどうなんだ。現場に血痕がないから、薬で死んでいたのを刺したって可能性もある」

「白鳥刑事の推理はどうなの」

「薬だろうね。【浅見光彦シリーズ】の（殺人）被害者の死因の統計を知っているかい。毒物・薬物・29%、絞殺・18%、撲殺・15%、溺死・11%、刺殺・10%、転落死・8%、その他・9%」

「さすがは経理課長ね。数字に強い」

郷田は皮肉ったが、白鳥はご機嫌の態で、

「おれは警察小説よりも、探偵小説ファンなのさ」

「探偵小説や推理小説は現実と無関係ではないから、その統計は当たっているかもしれないけど、あたしの推理は後にするわ」

「それは愉しみだねえ」

\*

「ところで、あれのどこが難事件なのよ」

言いながら郷田は、ガラス窓を開けた。

そこから飛鳥山公園の木々が見える。

夕闇が濃くなりはじめ、飛鳥山は黒い塊として見えた。

「おれが考える重要参考人が三人いる。表向きはただの参考人に過ぎないがね。事情聴取を数回」

「十人でなけりゃいいわ」

「まあな。その三人とは、まずホームレスのゲン」

「はだしのゲンね。本名は解らないのね」

「それと娼婦の花田夕子」

「王子に娼婦なんていないわ」

「すまん、〈自称娼婦〉。すまん、住まいは池袋」

「あんたが謝ることはないわよ」

「もう一人が困った事に、西園寺金時」

「都の不動産王ね」

「西園寺には動機はあるが、アリバイもある」

「なら、犯人候補からはずしたら」

「それが、いくつかの事件で名前が出た、殺し屋の加藤一平を使った可能性がある」

「なるほど。この三人なら、犯人はゲンね」

「なぜだ」

「被害者は、財布もスマホもスイカも盗まれているんでしょ」

「それは、被害者の身元隠蔽かもしれない」

「なら、あんたは」

「一番クサイのは、加藤だな」

「加藤はないわよ」

郷田は、加藤一平を三年前に調査したことがある。

加藤は渾名を〈飛び加藤〉と言って、殺しに飛び道具しか使わないという情報も得ていた。

従って加藤はなし。

凶器は見つかっていないが、いくつかの刺し傷が深いことを新聞で読んだ。

女性には無理な犯行だろうと、郷田は踏んだのだった。

薬を飲ませて刺したとしても、深くは刺せない。

従って夕子もなし。

消去法でゲン、というのが郷田の見解だった。

「勝手な推量をするな。おれの見るところこれは計画殺人なんだ」

「なら、どうしてあたしの所へ来たの。だいたい、警視庁の刑事が出しゃばる必要もないでしょに」

「あんたなら知っていると思ったから説明は省いたんだが、王子警察署は、警視庁が管轄する警察署の一つなんだよ。署員は二百五十名近くいるんだが、難事件は警視庁が出しゃばる事になっている」

「なら、あたしが出しゃばる事もないでしょに」

郷田は、何となく気乗りがしない。

「だから、難事件だと言っているだろ。〈自称娼婦〉の花田夕子は、殺された桜井が当日飛鳥山で会っていた。飛鳥山でたまたま会ったのか、それとも飛鳥山で落ち合ったのかは不明だが、目撃者もいる。ゲンは動機も不明アリバイも不明だが、飛鳥山公園を根城にしている。計画的な物取りの可能性もある。西園寺は胡散臭い仕事で桜井とトラブルになっていた。クサイと言えば、西園寺ほどクサイやつはいねえぜ」

白鳥はまた獣じみた声を出した。

\*

郷田は煙草を灰皿で揉み消すと、白鳥の持って来た紙袋を視て、

「ところでそれは手土産なの。あたしの好物の和菓子ね」

「いやこれはコンピュータ・データのプリントだ。門外不出だが、あんたなら信用できる」

「手土産も持って来ないやつを、あたしは信用しない」

「だから、これが手土産なのさ」

「すると、依頼人は白鳥刑事というわけね。一文にもならないじゃないの」

「タダ働きが好きなくせに、何を言うとか」

「タダ働きは基本的にやらないつもり。でも依頼人が払ってくれないのだから仕方がないじゃない」

「どうせ暇なんだろう」

「余計なお世話よ。最近是不倫ばやりでさ、浮気調査がけっこう忙しいの。物騒な殺人事件なんかには関わりたくないわね。せっかく貯金もたまって、念願の湘南へ引っ越すつもりなんだからさあ」

「かつて〈殺しの郷田〉と言われたおまえがねえ」

「まるであたしが人殺しみたいなの、その言い方は不快」

「おまえの台詞を借りれば、不快も快のうち。〈ひなぎく殺人事件〉も〈しらゆり殺人事件〉も助けられた」

「ふん。あんたがあたしを巻き込んだだけよ」

「これ、ささやかなもんだが」

白鳥は紙袋から小さな包みを出した。

開くと大福が三個。

「おや、気がきくじゃん。上中里の〈平塚亭〉なら団子がよかったけど、大福も好物。それならお茶でもいれるわ。あたしが二個、あんたが一個でいいかえ」

「いや、おれは糖尿病だ。おまえが三個だ」

「莫迦だね。大福は糖尿病の薬だよ」

「冗談言うな」

「あたしが冗談言わないこと、あんたなら知ってるでしょ」

「そういうことにしておくよ」

\*

ほうじ茶をいれて、郷田は立ったまま大福を頬張った。

「資料を見せてくれないかえ」

「さすがは王子一の探偵。いや北区一、もしかすると都内一」

協力すると解って、白鳥は猫撫で声を出した。

「なんでもいいから、簡潔に説明してちょ」

白鳥は紙袋からいろいろ取り出し、

「これは、三人分の事情聴取時の調書プラスα。加藤は当時の電話番号も解っているが、電話も居所もたびたび変えるやつだからなあ。花田は住所は解るが、ケイタイは現在使用されていない。ゲンだけは当然ながら、家なし電話なし。でも一日の大半は、飛鳥山公園のベンチで横になっているから、会おうと思えば一番楽に会えるはずだ」

「あたしが会いたいのは、花田夕子サンだけね」

その言葉は無視して、白鳥は続ける。

「飛鳥山に登るのは基本的に三箇所。JR王子駅中央口を出て階段で登るか、無料のモノレールを利用するか。あるいは南口を出て陸橋を渡って行く」

白鳥は身ぶり手ぶりで話した。

「知らないデカ。裏の方はどうなのよ。つまり都電飛鳥山駅の側」

郷田も、身ぶり手ぶりで言った。

「そっちの方は全く痕跡がない。目撃者もない。残っているのは上半身だけだが、モノレールの防犯カメラの映像。車内と乗降口のものだ。時間は午後四時」

白鳥は数枚の写真を見せた。

郷田は写真を注視する。

「どうかね、どうかね」

白鳥は猫背をさらに丸めて、郷田の顔を注視する。

「地味な帽子に黒いサングラスにでかいマスクか。怪しすぎるが、やつは犯人ではないわね」

「どうしてそんなことが言えるんだい」

「テレビの刑事ドラマ観ても、怪しすぎるやつが犯人だったためしがないもん」

郷田は、からかい笑いをした。

「そういう理屈はやめて、おれ同様、真面目によろしく」

白鳥は、本当に真面目な表情だった。

郷田は、二本目の煙草を深く喫って、

「あたしの記憶が確かなら、死体が発見されたのは、〈こどものひろば〉内にある都電車両、通称〈王電〉〈6080〉。その傍には機関車、D51 853が鎮座ましましている」

「さすがは地元だ。おれより詳しいな」

白鳥は、感心する以前に呆れる。

「〈王電〉は一応夕方四時三十分から午前九時まで使用不可。それまでは子供を遊ばせているママさんたちが休憩したり、子供がおやつを食べたりすることが多い。まあ日よけのあるベンチ代わりね。管理人も掃除人もいるから、ホームレスの寝床にはならない。要するに発見現場は、殺害現場ではないということよ。他で殺してあそこに運んだ。だから血痕がない。たぶん薬は直接の死因ではないわ。もちろん犯人が土地勘のあるやつだということは、天下の白鳥刑事なら察しているでしょうが」

「まあな」

「土地勘のあるやつは、防犯カメラの位置だって解っている。こんなへまはしない。それにさあ、防犯カメラがとらえたのは、飛鳥山に登る際の映像だよ。行きはよいよい帰りは怖い。逃げる際の映像はないの」

郷田は当然の疑問を呈した。

「それがないんだ。おそらく南口から逃げたんだな。そうすると防犯カメラに映っていた不審人物は、やはり土地勘のあるやつだってことになるぜ」

白鳥は即座に言って、広い額を搔いた。

「万が一だが、この男が犯人だと信じるとして、どうして花田夕子サンに事情聴取したの」

「実はかつて、花田夕子は〈男装の麗人〉と呼ばれていたんだ」

「麗人ねえ」

「おれが会ったかぎりでは、正真正銘麗人だ」

「それが、〈自称娼婦〉になったわけね」

「まあ、三十五年も生きていればいろいろあるさ」

「花田夕子サンは三十五かい。あたしには丁度いいな」

「何が丁度いいんだか解らんが」

「姉さん女房として、という意味よ」

「へっ、それは無理」

白鳥は意味ありげな笑いをこぼした。

郷田はその笑いを避けながら、

「もう一人、はだしのゲンは、どういう理由なの。ほとんど飛鳥山にいるんなら、わざわざ変装して女子供用の〈あすかパークレール〉に乗る必要はないでしょに」

「それがさあ、おまえなら知っているだろ、〈北区さくらSAKASO祭り〉、ごぞんじのように飛鳥山の桜は、江戸の八代将軍徳川吉宗が650本もの桜を植えて、庶民の行楽地としたのが始まりだから、花見のみならず弁当にだって伝統がある。ちなみに、8000株の躑躅、1300株の紫陽花もね。祭りは去年は、4月1日の土曜と2日の日曜に開催された。飛鳥山のホームレスはほぼ自主的に飛鳥山を降りたんだ。そして犯行は祭りの後」

「話の前半は知っているけど、後半は知らなかった。あたしだったら花見客の花見弁当の余りを頂戴するね」

「そうだろうな」

「やはり、ゲンが犯人よ」

その言葉は無視して、白鳥は郷田の顔に顔を近づけ、

「おれたちは、加藤一平が一番クサイとにらんでいる」

「おれたちじゃなくて、あんただけでしょ」

「まあね」

「加藤に動機はあるの」

「たとえ西園寺金時が依頼人かどうかは別としても、殺し屋は存在そのものが動機だ」

「アリバイは」

「殺し屋がアリバイ作りの天才なのは、おまえも知っているだろう。だから、調査を頼みたいのは、三人だが、まずは〈飛び加藤〉だ」

「でも、凶器は飛び道具ではない」

郷田は再び気乗りがしない様子になった。

「〈飛び加藤〉というのは、飛び道具云々からという説もあるが、実はあんがい殺しに飛び道具を使わない」

「そんな説は知らんがな」

「おまえは三年前の情報だろう。昨年からは、殺しの現場からひとつ飛びで逃亡す

るから〈飛び加藤〉なんだ、という説が極めて有力になっている」  
「あたしも時代遅れだな。この依頼はお断りするしかないなあ」  
「そう言うと思ったから、大福以外の手土産も用意してきた」  
「大福以上の手土産は、ないよ」  
「それがあるんだ。勿体ぶらないで言うよ。おまえが長年探していた姉さんが見つかったんだ」  
「信じられない。あたしが十年近く探してきた姉を、どうしてあんたがつけられたのよお」  
「偶然さ。この花田夕子の資料を、よく観てみろよ」  
郷田は初めてそれを観た。  
「どこ、どこ」  
「そこにほれ、記してあるだろ。本人が幾つで母親に死に別れて、どこの施設で育て、だれの養女になったか。その施設はおまえがかつて調査したところさ。しかし施設には、守秘義務というものがあるからな。怪しい探偵に教えるもんか」  
郷田は声を失った。  
黒ずんだ顔が、明らかに蒼ざめた。

\*

しばらくして、郷田はマルボロに火をつけ、  
「あんたの依頼は受けるよ」  
と静かに言った。  
それからいささか掠れた声で、  
「期限は」  
と聞いた。  
「そんなものはない、と言いたいところだが、おれは別件があるし、おまえは本職の浮気調査が忙しい。二十日間でどうかな」  
「その半分でもいいよ」  
郷田は言って、黒い恐竜の背中に似た飛鳥山を、窓から眺めた。  
「すまんね。頼りにしているよ」  
白鳥は頭を下げた。  
「ホントに済まないと思っているんなら、次からは電話一本してから来てね」  
「おまえの性格を知りすぎているから、この手しかなかったんだ」  
白鳥は、また頭を下げた。  
郷田は、渋い表情を作った後、手を叩いて、  
「そうそう、あんたが帰る前に、被害者の桜井個人に関しての、お互いの見解をすりあわせておきたいのね」  
「おまえやおれとは正反対、ということでもいいんじゃないかな」  
「具体的に言えや」



郷田は不快そうな声を出した。

「そう厭な顔しなさんな。桜井新吉、男盛りの四十歳で、イケメン。反骨心と正義感の持ち主。金も家族もあり、有名で人気がある」

「有名と人気はともかく、政治家で反骨心と正義感のあるやつなんか、あたしは知らないわ」

「おれも知らんが、それが強みというか売りというわけだ。弱味はそうだな、婿養子ってことくらいかな」

「それは初耳ね」

「どうせすりあわせなんか無理な相談なのだから、後は勝手に調べてくれ」

「そうね、それがあたしの専門」

ふたりは顔を見合わせて苦笑した。

\*

郷田狂介は、まず桜井新吉の調査から始めた。

地元では有名人なので、これはさほど時間がかからなかった。

それから加藤一平の調査に移った。

〈飛び加藤〉の調査は二度目だが、今回はさらに突っ込んだ。

どう突っ込んだかは割愛する。

\*

職業（と言っていいかは判らないが）「殺し屋」。

七歳のときに、父親を殺した、らしい。

十歳のときに、母親を殺した、らしい。

二十歳のときに、親友を殺した。

親友が金を貸さなかったというのが動機だった。

禁固十年の刑だったが、七年で娑婆に出て来た。

三十歳のときに、依頼されて大蔵大臣を狙撃し、負傷させた。

これは証拠不十分となった。

三十三歳のときに、依頼されて警視庁長官を狙撃し、負傷させた。

これも証拠不十分だった。

三十五歳のときに、依頼されて暴力団組長を狙撃し、殺した。

これも証拠不十分だった。

他に十三件の殺しをやった、らしい。

殺し屋はスポーツジムに通い、プロテインを飲み、牛乳を紙容器からじかに飲み、ビーフジャーキーを齧り、めったにレストランには行かない。

殺し屋の苦手は、スープを飲むことだけだ。

無音の仕事を自慢自認しているのに、大きな音をたててしまう。

殺し屋は女嫌いである。  
女は情に左右され、女扱いも情に頼らざるを得ないからである。  
殺し屋は西園寺金時に心酔している。  
理由は、スープを無音で飲む事ができるからだ。  
殺し屋は現在三十九歳。  
スリムな体型の、ほどいい程度の長身。  
無造作なヘアスタイル。  
カジュアルなブルゾン姿。  
当然、もてる。  
女嫌いなのにもてると解って、男好きなのにもてない郷田は、ここで調査を終了した。

\*

調査資料をまとめながら、通じないはずの加藤一平のケイタイに、ダメモトで電話を入れてみた。

簡単には出るとは思われなかったが、簡単に出た。

「郷田探偵、お久しぶり」

以前とくらべて快活な声になっていて、意外だった。

「あたしを覚えていてくれたんだね」

「大物の狙撃疑惑に、小物の探偵が出てきたもんだから忘れてやしないよ」

皮肉な言い方でも、声は爽やかだった。

「あのとき同様にシラをきるだろうけど、一応質問してもいいかえ」

「何なりと」

「知ってるかどうか、〈飛鳥山殺人事件〉のことなんだけどさ」

「ああ、〈サクラ殺人事件〉ね。昨年の話なんかすると鬼が怒るよ」

知っているどころではない、と郷田は何やらクサイ臭いを嗅いだ。

「単刀直入に聞くけど、西園寺金時からの依頼はあったの」

「そいつは単刀直入ではなく、単細胞の質問だよ。西園寺さんは桜井さんとトラブルにはなっていたけれども、個人的な怨みで相手を殺すような料簡の狭い人間ではない。それに私はもう、〈飛び加藤〉はとっくに廃業したんだよ」

「信じられなーい」

信じてもよかったが、とりあえずそう言った。

「他人を信じないのが探偵の性分だから、それはそれで文句はないよ。私だって〈飛び加藤〉は廃業しても、殺気じみた性分はなかなか治らないからなあ」

「鬼を怒らしてもかまわないけど、昨年の四月上旬の活動を教えてくれないかな」

「活動ってアリバイってことかい。あのころは活動写真に夢中でね。私はこう見えてもアニメ映画が好きなんだ。『風の谷のナウシカ』はよかったなあ」

「信じられなーい」

信じてもよかったが、とりあえずそう言った。  
それは郷田の探偵稼業としての作戦のひとつなのだった。  
「信じられない探偵は、海か川に沈めてやるに限るな。事務所の傍を石神井川が流れているだろ」  
加藤の声に殺気はまったく無かった。  
「あたしは音無川と呼んでいる」  
「でっかい錨を足に巻き付けて、その音無川の底に沈めてやろうか」  
郷田は苦笑して、  
「歌川広重の浮世絵でも観たの。たしかに〈名所江戸百景〉では〈王子音無川〉に水が滔々と流れているね。あれは安政七年に描かれたものよん」  
「ふん、それがどうした。蘊蓄を披露、連絡をしてきたのかよ」  
「まあ、そういうこと。ありがとう」  
と言って、郷田は電話を切った。  
(音無川に水が無い事を、加藤は知らない)  
つまり、土地勘がないのだと郷田は結論づけた。  
それから、白鳥刑事への提出用として、加藤一平に関する調査資料をまとめ、最後に〈シロ〉と記した。

\*

花田夕子には、直接会って話を聞くことにした。  
白鳥から預かった資料に、夕子の住所と地図はあっても電話番号はなかったからだが、むろんそれだけではない。  
おそらく実の姉にまちがいはない夕子に、会って見たかった。  
いかにも春らしい陽気の土曜の昼下がりにした。  
郷田は池袋に向かった。  
地下鉄王子駅から南北線に乗り、後樂園で丸の内線に乗り換えて池袋に着いた。  
地図通りなので、花田夕子の部屋はすぐに解った。  
池袋北口からラブホテルが乱立する川越街道方面に歩き、一階がコンビニの五階だでのマンションの二階だった。  
郷田は咳払いをひとつしてから、扉脇のチャイムを押した。  
返事はなく、出ても来なかった。  
何度か押したが駄目だった。  
仕方なく郷田は、一階のコンビニに降りて行って缶ビールを買うかトマトジュースを買うか迷って、肝臓が弱っている気がしたので後者にした。  
コンビニの外で、煙草を喫いながらトマトジュースを飲んでいると、駅方面から女性がひとり歩いてきた。  
褪せたTシャツにジーパンという恰好だったが、とても目立った。  
遠目でもスタイルがいいのが解った。

髪を金色に染めて、化粧は薄かったが目鼻立ちは濃かった。

近づくと、夕子だと解った。

なにしろ、母親の写真にそっくりだった。

郷田は、声をかけるのをためらった。

(彼女が犯人だ)

と第六感が、そう郷田に告げたからだ。

夕子は、ちいさめのキャリーバッグを引いたままコンビニに入った。

しばらくして、週刊誌を買って出て来た。

そのときちらりと眼が合った。

郷田はふんぎりをつける気持で、声をかけた。

「花田夕子さんですね」

夕子は、郷田を睨んだ。

「刑事さんですか」

「いやその、わたしは、しがない探偵ですが」

郷田は夕子から眼をそむけて、頭を掻いた。

刑事でないと知って安心したのか、それとも郷田の仕種に警戒心を解いたのか、表情が柔らかくなった夕子は、

「探偵さんが何のご用かしら」

と聞いた。

郷田は腰を低くして、

「ちょっとお時間をいただけないかと」

「だから何のご用かしら」

夕子はもう一度聞いた。

「桜井新吉さんに就いてお聞きしたいことが」

「それは一年前に警察にお話しましたけど」

「わたしは警察ではありませんので、別の意味でお聞きしたいことが」

「別の意味、ですか」

夕子は明らかに、別の意味という言い方に、反応した。

「別の意味、です」

それに気づいた郷田は、繰り返した。

「でも、部屋はちらかっていて」

「いやいや、いくら昼間だからといって、いくらわたしが女嫌いだからといって、女性一人住まいのお部屋にお邪魔する気はありません。よろしければ近くの喫茶店で」

「一時間くらいしか、余裕がないのよ」

「いえ、三十分でけっこうです」

交渉は成立した。

郷田は夕子を促し、すこしだけ肩を並べて歩き、池袋駅北口近くの喫茶店〈伯爵〉に入った。

\*

店内は混んでいた。  
それでも窓際の二人用のテーブルが空いていた。  
ただの一人の探偵ということで通したい郷田は、名のらずに名刺も渡さなかった。  
意外にも夕子は、不審な顔をしなかった。

\*

コーヒーが来ると、郷田は声をひそめて、  
「一番聞きたいのは、どうして〈自称娼婦〉なのかということです」  
夕子はしばし額に指先を当てていたが、つと眼をあげると、  
「亡くなってもう一年だから、言ってもいいかな」  
と独り言の口調で言った。  
「言ってもいいでしょう」  
郷田が意味も解らずにそう押すと、  
「わたし、桜井さんの愛人だったんです。三年のおつきあい。でも愛人がいると解ると、奥さんが厭な思いするんじゃないかと思って。一夜限りの娼婦なら、まあ仕方ないかなって」  
夕子はなぜか周りの客を気にしなかった。  
「じっさい、奥さんはあなたの存在を気にせずに済んだのですね」  
「ええ、お葬式にも行かなかったし、警察にもそれで押し通したものですから」  
「飛鳥山公園で会っていたというのは事実なんですね」  
「ええ、逢い引きの場所としてよく利用しました。あの日は、お祭りの後の月曜だから、人が少ないはずだよ、二人だけでお花見をしようと、桜井さんの提案です」  
「会ったのは何時ころでしょうか」  
郷田はマルボロを口に銜えた。  
けれども喫わずにいた。  
「午後五時の約束だったんですが、桜井さんは会議が早く終わったとかで、一時間ほど前に来たそうです。逆にわたしは三十分遅れてしまいました。〈北区飛鳥山博物館〉に江戸時代の〈花見弁当〉の見本が展示されているでしょ。あれにそっくりのお弁当を作っていて遅れてしまったのです」  
「あれはわたしも、観るたびに食べたいと思っていましたよ」  
郷田が笑うと、夕子も初めて笑って、  
「桜井さんもそう言っていたので。でも問題が生じました」  
夕子の笑顔が真顔に変わった。  
「問題とは」  
夕子は声を落とし、

「マグカップに桜井さんの大好きなマッコリを入れて来たのですが、その中にわたしは常用していた睡眠薬を入れておいたのです」

「また、どうして」

「ホントに莫迦な理由なんです。探偵さん、笑わないでくださいね。桜井さんは会うとよく電話がかかって来て、仕事だからと早く帰ってしまうことが多かったんです。わたしはこの日だけはできるだけ長く一緒にいたいと思って、もし電話がかかってきても動けないように」

そんな理由で薬を使ったりするだろうか。

夕子はもしかするとあの日、桜井との無理心中を考えていたのではないか。

郷田はいささか穿った見方してみたが、それは口にしなかった。

「女心ですね。でも、男にだってそういう気持は解りますよ」

「よかった。でもよくなかったのは、反対にわたしの方に電話がかかって来てしまったんです」

「あらら」

「もう調査済みかもしれませんが、わたしはダンサー、ストリッパー、グラビアモデルなどを経て、いまはエアロビクスのインストラクターをやっています。電話はジムからで担当のイントラが急病で倒れたので、急遽代行をやってほしいと。かなり切実な懇願だったのと、わたしはフリーですから、ジムの責任者に悪い印象を与えたくないのとで、OKしてしまったのです」

夕子は後悔の念なのか、ちょっと顔をしかめた。

「そのとき、桜井さんは」

「マッコリを飲んだせいで、うとうと状態でしたね。わたしはベンチでこっくりやっている桜井さんに、聞こえているのかどうかも解らない桜井さんに、こう伝えました。緊急で赤羽のジムに行くけど、二時間で戻るからここで必ず待っていてね、一緒に夜桜を観ましょう」

「後で桜井さんが怒るとは思われなかったんですね」

「桜井さんはその赤羽のジムの会員で、わたしたちはそこで知り合ったので、わたしの仕事に理解があると、傍から見れば甘えたんですね」

「あなたが飛鳥山を出たのは、何時ごろですか」

郷田は何となく警察の訊問風だと思いつつ、できるだけやわらかい声を出して聞いた。

「正確には覚えていませんが、七時半からのレッスンでしたから、六時半くらいには出たと思います」

「それから、それからあなたはどうしましたか」

郷田は抑えきれずに、身を乗り出した。

夕子に会ったときと違って、

(彼女は犯人じゃない)

との思いを強くしたからだ。

「レッスンを終えたのが八時半、シャワーを浴びる前と後に、桜井さんのケイタイ

に連絡をしたのですが、反応がまったくなくて」

「ということは、九時半ころに飛鳥山に戻って来たのですね」

「そのとおりですが、ベンチには桜井さんがいません。花見弁当の器もマグカップも見当たりません。きっと引き上げたのだらうと思いましたが、もしかすると桜井さんも急用で出かけて、また戻ってくるのかもしれないと、それにとても申し訳ない気持ちもあって、終電までそこにいました。仕方なく引き上げたのですが、何度ケータイに連絡しても通じないので、その夜は一睡もできませんでした」

「GPS機能はつけていませんでしたか」

「それが、桜井さんは、奥さんやSPに居場所がばれるからと言って」

(婿養子の辛さというわけか、それともやはり後ろめたかったのか)

郷田は半々かと思ったが、訊ねたりはしなかった。

「事件を知ったのは、テレビですか」

「いえ、ケータイの情報欄で知りました」

「なるほど。それであなたはケータイを持たなくなった」

「そうではなくて、もしジムから連絡がなければ、こんなことにはならなかったと思って、それからは厭がられるのを覚悟で代行拒否を」

「なるほど。もう三十分過ぎました。すみませんでした。これからお仕事だったのではありませんか」

「じつは今日はお休みの日で、営業の面接に行っていたんですが、そのジムでたまたま見た週刊誌に驚いて、早く帰ってきて同じ週刊誌を買ったのです」

夕子は買った週刊誌を開いて見せた。

そこには〈未解決事件〉の大見出しと、桜井新吉の大きなモノクロ写真が載っていた。

「何か新しい情報でも」

「そうではなくて、この写真が欲しかったんです。よく撮れていますよね。わたし、桜井さんの写真一枚も持っていなかったもので」

(それはきっと、桜井が夕子に、そうさせたからなのだろう)

と郷田は思ったが、それは聞かなかった。

「最後にひとつだけ」

「何でしょう」

「桜井さんの当日の恰好を、教えてほしいんですが」

「さすがは探偵さん。あの恰好は怪しいですものね。わたしが来るまでは、いえ飛鳥山が暗くなるまでは、帽子にサングラスにマスク。いくら正体を知られたくないと言っても、余計に知られてしまうわ。そうわたしはひやかしたものです。桜井さんはいつでもどこでも慎重というか神経質でしたね」

(やはりそうか)

郷田は薄々感じていたことが鮮明になった。

(あの防犯カメラに映った人物は、加害者ではなく被害者だったのだ)

「でも、どうして階段ではなく、〈あすかパークレール〉に乗ったのでしょうかね。」

防犯カメラもあるし、写真週刊誌も狙いそうだし」

「それはあんがい単純なことなんです。わたしが木のベンチに坐りたいといつも言うから。木のベンチのスクエアは、モノレールのすぐ傍で、あとはみんな石のベンチなんです」

この言葉は、飛鳥山をよく知っている郷田には説得力があった。

\*

花田夕子とは〈伯爵〉の外で別れた。

郷田は常識的な感謝の言葉を述べた後で、名刺を渡そうとしたが、夕子にやんわりと拒まれた。

夕子は微笑みながら、

「叔母が亡くなる時に教えてくれました。弟が生きていたなら探偵さんくらいの年格好でしょうね。わたしが協力したのは、それがただひとつの理由です」

(ああ、ああ)

郷田は深く頷いた。

金髪を風に靡かせて去って行く、夕子の後ろ姿を見送りながら、  
(あの角で振り返るにちがいない)

ふと郷田は思った。

けれども、振り返らなかった。

(感傷的なのは自分だけかもしれない)

郷田は苦笑しつつ思った。

(夕子には、いや、姉には、もう新しい男ができているかもしれない)

そうでなければ、あれほど率直に桜井のことを話せないだろう。

男の穴を埋められるのは男しかいない。

すくなくとも弟ではない。

事務所に戻って、花田夕子に関する調査資料をまとめた。

最後に「シロ」と記した。

\*

郷田がゲンを探し当てたのは、それから五日後の夕刻だった。

白鳥は楽に会えると言っていたが、そんなことはなかった。

郷田はその間ずっと、飛鳥山とその周辺を歩き廻った。

その日、飛鳥山の桜はほとんど散って、数名の掃除人が忙しそうにしていた。

暇そうなのはホームレスたちで、木に覆われた道端にあるベンチに横になっていた。

その数名のなかにゲンがいた。

ゲンの特徴は、あらかじめホームレス仲間に調査をしていた。



頭が禿げ上がった老人で、禿頭に汚れたバンダナをしている。

\*

郷田はわざと、ホームレスを装っていた。

とくに装わなくともホームレスにまちがえることがあるのだが、念のため新聞紙を詰めた紙袋をふたつ提げてうろついたので。

郷田はゲンが横になっているベンチに近づき、

「ゲンさん、ええ陽気じゃのう」

思った通り親しげに話しかけられた。

それに暑くもない寒くもない、珍しく丁度いい気候だった。

ゲンはおもむろに上半身を起こした。

「おめえ、だれじゃ」

ゲンはしょぼついた眼で郷田を眺めたが、すぐに仲間だと察知したらしい。

「おれっちは、信夫山の麓で生まれたろくでなしじゃ」

嘘である。

ゲンと同じ福島生まれを、郷田は装った。

「おうおう、同郷かのう」

ゲンは歯のない口を大きく開けた。

「んだ、んだ。ゲンさんはどこじゃ」

「わしは、ふ、ふ、双葉町」

「するてえともしかして、原発の近く」

白鳥から預かった資料で知ってはいたが、知らないふりをした。

「なんじゃ、おめえ、探偵みたいじゃのう」

「すまんのう。同郷の人間には興味があるべ」

「それもそうじゃのう」

ゲンはすぐに納得した。

「それはそうなんじゃ」

郷田の言葉とほぼ同時に、ゲンはぼつんと吐き出す。

「わしは、原発の日雇い作業員じゃった」

初耳だった。

資料にもそんなことは記されていなかった。

郷田の脳味噌が回転したが、平然さを装い、

「するてえと何か」

「そうじゃ。原発はもうごめんじゃ。原発さ駄目だべ。わしのダチは放射能で三人死んだぞい」

「ほう、それでゲンさんと呼ばれとるんか」

「当たり、と言いたいのがのう。本名は佐藤源次郎ださ。それでガキのころからゲンさん。福島は佐藤姓が多いから、姓では呼ばれたことねえ」

「政治家みたいな名前じゃのう」

「面白いこというじゃんか。おめえ、名前は」

「オオバカンゾウ、大莫迦の肝臓病って言われとるよ」

「おめえ、面白いのう。面白いやつは、いいやつだべ」

ゲンはまだ歯のない口を大きく開けた。

「ゲンさんも面白いっぺ」

「そうかのう」

満更でもない表情になった。

郷田は押し込むことにした。

「面白いことと言えよ。知っとるか、去年ここで起きた殺人事件さ」

「わしは知らん。わしはホシじゃねえ」

「ゲンをホシだなんて、だれも言うたらん。殺されたのは区議の、なんちゅうたかのう」

「桜井新吉じゃ。悪党じゃ」

(桜井がなぜに悪党なんじゃ)

と言いかけたがやめて、

「ほうじゃ、ほうじゃ、あいつは悪党じゃ」

ゲンは拳を振り上げて、

「赤羽台団地を知っとるじゃろ」

「おうおう、知らいでか。半世紀以上前に完成した大団地の草分けじゃろ。老朽化でいま取り壊しや改装をやっとるそうな」

「あすこさ原子力発電所にするたあ、悪党の親玉じゃ」

その話は聞いたことがあった。

桜井新吉の舌禍事件として、小さくはあったがテレビでも週刊誌でも取り上げたものだった。

だがあれは、舌禍と言うよりも冗談で、都内に原発がないのは地方の人びとに申し訳がない、という話のおまけみたいなものだった。

あるいは白鳥の言うように、桜井の反骨心と正義感の表出だったのかもしれない。

だいたい赤羽は、荒川が近いけれども海とはだいぶ離れている。

郷田も詳しくは知らないが、原発は海の傍と相場が決まっている。

そんなことにゲンは気づかなかったのか。

\*

「とんでもないこっちゃ」

つと郷田は叫んだ。

「とんでもないやっちゃ」

相呼応して叫んだゲンは、郷田に握手を求めてきた。

「ゲンさんならずとも、殺したくなるのう」

この台詞に一瞬ゲンは息を止めた。

それから、郷田に縋ってきた。

「わしは、わしは、わしは」

「解つとる、解つとるよ。ゲンさんが殺らなければ、きつとおれっちが殺つとったさ」

郷田は強い口調で言った。

「戻るとだれかが、わしの寝床で鼾かいとるでねえか。もしかして仲間か、ただの酔っ払いかと思うたが」

「桜井だったんかあ。だども、ここで殺って〈王電〉まで運ぶっちゃ、並じゃねえべ」

「いんや、ここは暗くてようわからん。喚いてベンチさ蹴ったら桜井は飛び起きて、慌てふためいて〈こどもひろば〉の方面に逃げただよ。そのとき灯籠の灯りに照らされて、わしは桜井新吉だと解った。わしは、桜井の顔をよう知つとった。週刊誌を何度も見たからの。こりゃあ天の恵み、神の授け者と思うた。わしは追いかけて何度も刺しただよ。桜井は〈D 5 1〉機関室で息耐えたでのう」

(あそこは死角かもしれん)

ゲンは血痕を拭き取り、深夜になって人影が見られないのを幸いに、桜井の死体を〈D 5 1〉からすぐ近くの〈王電〉に移した。

しかし自分たちの感覚ではすぐ近くでも、死体を運ぶには距離が長過ぎる。

マグカップや花見弁当の器は、そして桜井のケイタイや財布は、痕跡や身元云々で処分したと言うよりも、失敬したのかもしれない。

意地悪な見方をすれば、原発云々ではなく盗みが目的だった可能性もある。

だが後は白鳥にまかせる他はない。

郷田は念のためにさりげなく聞いた。

「殺ったのは四月三日の八時ころかのう」

「たぶん八時ころじゃ」

だが、どうして移したのだろう。

その疑問には、尋ねなくともゲンが答えてくれた。

「わしは鉄ちゃんなんじゃ。鉄ちゃん仲間のなかでも〈D 5 1のゲン〉と呼ばれとった。あの神聖な場所に、桜井なんぞの死体を置いておけるもんかい。そうじゃろ、カンゾウさんよ」

「そうじゃ、そうじゃ」

と郷田は言う他はなかった。

「運んだのは深夜じゃ」

「だども、機関室から〈王電〉までは二十メートル近くあるじゃろ。よく運べたのう」

「わしは年寄りじゃが、昔とった杵柄言うてな。これでも力自慢で有名だったんじゃ」

だが、無理だ。

死体の重さは、郷田もよく知っている。

それに〈北区さくらSAKASO祭り〉の前後に、〈王電〉の扉の鍵をかけ忘れるわけがない。

〈王電〉の姿を想い浮かべながら郷田は、おそらくいやまちがいなくガラスの入っていない窓から桜井の死体を入れたのだと考えた。

D51の機関室から運ぶのだって、力自慢でも無理だから、数名の仲間に助力を頼んだに違いない。

そのとき戦利品を、連中に謝礼としてあげたのだろう。

けれども仲間に手伝ってもらったことも、その仲間の名前も、ゲンは絶対に言わないはずだ。

郷田は詰めに入った。

「じつはのう、ゲンさん。桜井新吉なんじゃが、婿養子で前に名前は佐藤新吉。おれっちの娘がちいと桜井を知っとるんで」

「ま、まさか」

ゲンの顔色が変わった。

「まさかついでに言うとな、桜井の生まれは、福島浪江町」

「そ、それじゃ」

ゲンの顔色はさらに変わった。

「そうなんじゃ。赤羽に原発をなんて桜井が口走ったのは、何よりも福島の原発事故に対する怒りなんじゃ。東京の人間は福島の人間の哀しみを知らんという、そのことに対する怒りなんじゃ」

ゲンはいよいよ言葉を失った。

「ゲンさん、ゲンさんよ。ダチでなきや言わんのだがのう」

「ああ」

ゲンは郷田を視た。

「刑事の下っ端をやっとるダチから聞いたんじゃが、もう警察はゲンさんが犯人じゃと確証を得てさ。近いうちに動き出すそうじゃ。おれっちはホントはこのことを言いたくてきたんだよ」

ゲンは驚かなかった。

項垂れただけだった。

郷田はそんなゲンをひたすら見詰めていた。

しばらく経ってゲンは、深いためいきの後で、

「そうか、そうじゃのう。そんなこと、いつかはばれるもんじゃ」

「おれっちの考えじゃがのう。警察から逃げることはできんが、警察に先を越すことはできるぞい」

郷田はゲンの肩に手を置いて静かに言った。

「先を越すたあ」

「つまりよ、自首するんじゃ」

ゲンはちょっとだけ考える風をしてから、

「そうすっぺ」

「んだ。すくなくともメシの心配はいらんでのう」

「庖丁はどうすっぺ」

「なんじゃ、捨てておらんかったのかい」

「この飛鳥山はわしの第二の故郷じゃ。故郷に凶器を埋めるわけにいかんじゃろ」

「だば、そいつを持って出頭せいや」

「そうすっぺ」

「それがええ、それがええ」

「わしもそう思っとったがのう、一年も踏ん切りがつかんで情なか。同郷のカンゾウさんに言われて、ようよう決心がついたわい」

「ええじゃ、ええじゃ」

郷田は何度もゲンの肩を軽くたたいてから、飛鳥山を後にした。

事務所に戻るとすぐに、ゲン本名福島太郎の調査資料をまとめた。

最後に〈クロ〉と記した。

そして一服してから、白鳥刑事にそっけない留守電を入れた。

**【完了】**